

平成 30 年 8 月 31 日現在

機関番号：40124

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370066

研究課題名(和文) サンスクリット語古典のペルシア語訳とインド古典諸学の体系

研究課題名(英文) Persian translations and adaptations of Sanskrit classics and Indian traditional knowledge systems

研究代表者

榊 和良 (SAKAKI, KAZUYO)

北海道武蔵女子短期大学・その他部局等・講師

研究者番号：00441973

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、サンスクリット語古典から翻訳・翻案されたペルシア語文献をインドの伝統的知の体系の中に置くことで、インドの伝統的知識がどのように翻訳・翻案文献を通して伝えられ、イスラームの古典的知識の体系に組み入れられていったのかの文献的証左を探った。アブル・ファズルが『アクバル会典』で描いたインドの古典的知の体系は、ペルシア語の翻訳・翻案文献に基づいたものであった。この研究で副次的に明らかになったことは、『カーマルー五十章編』を通じて伝えられた『アムリタクンダ』に基づいたサンスクリット語文献群とその伝播経路である。インド固有の「息の学」は、翻訳文献を通じてイスラームの伝統的な知の体系に同化された。

研究成果の概要(英文)：Knowledge has been given fundamental importance in the tradition of Islam. By the end of the sixteenth century, a large number of Sanskrit classics had already been translated into Persian, and Indian ideas had gradually permeated the world of Indian Muslim intellectuals. In this project, situating these Persian works in the context of Indian traditional knowledge systems, we found textual evidences how Indian traditional knowledge systems were transmitted and assimilated into Islamic knowledge systems through these translation activities. A variety of Persian works demonstrates Abu'l Fazl's systematic outline provided in the A'in-i Akbari. The byproducts of this project are the discovery of Sanskrit textual sources of the Amrtakunda that was transmitted through the Kamarupancasika and the ways of their transmission. Indian indigenous science of svāra was assimilated into Islamic knowledge systems to acquire wisdom.

研究分野：人文学

キーワード：学問体系 ペルシア語訳 サンスクリット語古典 翻訳 インド・イスラーム

1. 研究開始当初の背景

本研究の原点は、2010-12年に実施した科学研究費補助金(22520380)「サンスクリット語古典のペルシア語訳文献史の基盤的研究」で作成したサンスクリット語からイスラーム系言語への翻訳文献リストと、17世紀半ばに秘書階級出身のヒンドゥー教徒、デーヴィー・ダースが編纂したペルシア語訳されたサンスクリット語古典の翻訳・翻案撰文集『真理の精髓(Khulāṣah al-Khulāṣah=Sāra Tattva)』にあった。先行研究の多くが、ペルシア語文献史の上でのサンスクリット語古典からの翻訳・翻案文献の書誌的研究や個々の内容紹介にとどまっていたのに対して、翻訳・翻案文献をインドの伝統的学問体系の中に配置して、イスラームの知的伝統との相互交流の結果ととらえて分析し、評価することを試みたのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、インド・イスラーム文化交流史において、インドの伝統的な学問体系がどのようにイスラーム系言語により紹介され、どのように個々のサンスクリット語古典の翻訳・翻案文献とかわり、いかにイスラームの学問体系と関係づけられていったのかを明らかにすることにある。

3. 研究の方法

インドの学問体系をイスラーム系言語でまとめたものとして、ムガル皇帝アクバルの時代の宮廷史家アブル・ファズルによる『アクバル会典(A'in-i Akbari)』(1595/6)の「インドの学問」の項に紹介されるインドの伝統的諸学をとりあげ、そこに紹介されている学知の種類を同定し、関連する翻訳・翻案文献との照合をおこなった。ついで17世紀半ばにインドのパールスィー教徒によって著された『諸宗派の学院(Dabistān-i Mazāhib)』の「インド人の見解」に紹介される学問体系を分析し、言及されている文献や人物を同定することを試みた。さらに写本として残されている翻訳・翻案文献の中で、インドの伝統的学問体系に言及している箇所を調査した。一方、知の分野のなかでも、宗教・哲学に関連する翻訳・翻案文献を中心に、テキストの伝播と変容を読み取るために内容の精査を行ってきた。

4. 研究成果

(1) インドの古典的学知との出会いと翻訳活動の歴史

①イスラームは、版図を拡大する中でさまざまな知の体系を学び、知を何をおいても重要なものとみなし尊重するようになり、学問を奨励し、獲得した外来の知を自分のものとしてきた。イスラーム世界において、翻訳は知を獲得する手段として欠くことのできないものであった。インドにイスラーム政権が樹立される以前から、パフラヴィー語を介してアラビア語に翻訳されていた実用科学としての天文学、医学、占星術、毒物学、蛇を操る術ばかりでなく、音楽、韻律学、倫理学、

物語文学などのインドの学知は広く知られていた。イスラーム知識人たちは、当初の船乗りや旅行家や地理学者たちが示したような単なる驚異的的ではなく、知の探究を目的として、インドの学知の情報や文物を紹介してきた。インド各地にイスラーム政権が樹立されてからのちも、イスラーム政権の首長たちはインドの古典的学知や技芸を評価し、インドの知識人や匠たちとの交流を深めることを奨励してきた。その結果、数多くの翻訳・翻案文献が残されることになった。②翻訳の担い手や対象となった人々に注目すると、イスラーム政権樹立からイギリスによる植民地支配までのインドにおけるサンスクリット語古典のペルシア語への翻訳活動は、重なり合う部分も含めて5つの時代に分けて考えることができる。叙事詩や実学を主とした翻訳活動が行われたムガル帝国成立までの時代、宮廷主導の戦略的な翻訳活動が行われたアクバル時代、重訳を繰り返すとともに個人的な関心から精神世界の探究にも幅を広げたダーラー・シュコーまでの時代、ヒンドゥーの書記階級の台頭からイギリス植民地支配までの、異なる言語で自らの文化を語る翻訳と近代諸語によるペルシア文学の改作・翻案が行われた時代、そしてイギリス植民地政府のもとでの統治のための翻訳活動の時代である。

③最初期に行政語・文芸語としてのペルシア語による翻訳活動を支えたのは、アラブ世界・イラン・中央アジアから仕官を求めてやってきた伝統的イスラームの教育を受けたエリートたちであった。ムガル帝国第3代皇帝アクバルは、先の時代のバグダードのカリフたちやペルシアの皇帝たちの範にならって「翻訳局」を設立し、実用科学だけではなく宗教、法学、文学など幅広いジャンルにわたる翻訳活動を行わせた。彼は自分たちの祖先の系譜だけでなく、ギリシアに学んだイスラームの伝統的学問を伝える文献を集めさせ、自ら講書によって学ぶ一方で、サンスクリット語古典を自らの図書館に所蔵し、インド人パンディットらの助けを借りてペルシア語に翻訳させ、完成した翻訳書を細密画などで装飾させて貴顕や臣下らに配布した。翻訳対象は、医学、数学、天文学などの実用科学にとどまらず、歴史、叙事詩、教訓的説話など幅広いジャンルに渡った。中央政権ばかりでなく地方政権の貴族たちも同様で、さらに近代インド諸語による民衆文学にも翻訳活動や庇護の手を拡大した。

④第4代皇帝ジャハーンギールの時代から第5代皇帝シャー・ジャハーンの子孫ダーラー・シュコーの時代までは、宮廷にかかわりをもつ人々の個人的関心にもとづく翻訳も行われ、仕えた皇帝や貴族に捧げられた。一方で、既に14世紀から編まれてきたペルシア語の教則本や語彙集を学んだヒンドゥー教徒やジャイナ教徒の知識人たちは、イスラーム政権内部で職を得て、とりわけ書記階級が翻訳

者や写字生として活躍するようになった。彼らの参画により、翻訳に厳密さが加わる一方、市井で用いられていた近代諸語の混入も多くなり、ドーハー(二行詩)やカヴァチャ(守護呪)なども挿入され、独自のスタイルが生みだされるようになった。

(2) サンスクリット語古典のペルシア語への翻訳・翻案文献

目録研究にもとづいて書誌情報をまとめたさまざまな先行研究は、いかなるサンスクリット語古典がペルシア語に翻訳・翻案されたかの概要を示してはくれたが、実際に写本にあたってみると内容との不一致など誤りも多かった。新たに整理してみると、翻訳・翻案された文献は、ヴェーダ文献の中では諸ウパニシャッド文献；叙事詩としては『マハーバーラタ』、『ラーマヤナ』、『アディアートマ・ラーマヤナ』、『ラグ・ヨーガヴァーシシュタ』、アワディー語で著されたトゥルスィーダースの『ラームチャリトマーナス』；プラーナ文献ではバーガヴァタ、ヴィシュヌ、シヴァ、スカンダ、ヴァーユ、パドマ、ブラフマーンダ、ブラフマヴァイヴァルタなどのプラーナとクリシュナの神話『ハリヴァンシャ』；王統史や歴史書としては『ラージャタランギー』、『ラージャーヴァリー』；説話文学としては『パンチャタントラ』、『カリラとディムナ』の改訳文献群、『ヒトーパーデーシャ』、『カタールサリットサーガラ』、『鸚鵡七十話』、『獅子座三十二話』、『屍鬼二十五話』；法典類では『マヌ法典』、『ヤージュニャヴァルキヤ法典』への註釈『ミタークシャラー』；ギーター文献では『バガヴァッド・ギーター』、『ウッタラ・ギーター』、『ラーマ・ギーター』、『アシュターヴァクラ・ギーター』；占術書では『ブリハット・サンヒター』、『カルマヴィパーカ』、『サムドリカ』；タントラ・ヨーガ文献では『アムリタクンダ』に関連をもつ『生命の水槽』や『生命の海』などの諸論攷、『ゴーラクシャシャタカ』、『シヴァスヴァローダヤ』；性愛論の『コーカシャーストラ』；獣医学書の『シャーリホートラ』；数学書では『リーラーヴァティー』、『ビージャガニタ』；音楽理論書では『ラーガの鏡』、『音楽の鏡』、『パーリジャータカ』そして『ラーガマーラー』などが残されている。医学書や天文学書に関しては、さまざまな綱要書などにサンスクリット語古典の書名を伴って、その分野の知が織り込まれていることがわかる。

(3) インドの古典的知の体系の紹介

①インドの伝統的知の体系を網羅的に扱ったアラビア語による文献は、アル・ビールーニーによる『インド誌』や11世紀末ホラーサーン生まれの宗教史家シャフラスターニーによる『諸宗教と諸学派の書』が広く知られているが、インドの地でペルシア語で叙述した代表的な文献は、宮廷史家アブル・ファズルによる『アクバル会典』である。この書の「インドの学問」における9つの哲学学派

の解説は、その派の創始者、神観念、来世観、世界観、認識手段(判断根拠)、教理の特徴、主要教典名、その内容、分派の紹介などからなる。ここでは、ニヤーヤ、ヴァイシェーシカ、ヴェーダーンタ、ミーマーンサー、サンキヤ、パータンジャラ(ヨーガ)学派；ジャイナ教徒、仏教徒、唯物論者らの考え方が紹介される。中でも、ニヤーヤ学派とジャイナ教徒の考え方の解説が充実しており、当時の学問的趨勢と宮廷内でのジャイナ教徒の知識人の台頭を窺い知ることができる。ついでアブル・ファズルが挙げるのは、18種の学問としての4ヴェーダ、プラーナ、法典、音韻学、祭儀学、文法学、語源学、天文学、韻律学、聖典解釈学、論理学、医学、兵法、音楽学、実利学である。内容的には、文法学を除いて、分野名と文献名を列挙するのみである。それにひきかえ、さらに付け加えられる14種の学問や技芸には、丁寧な解説が加えられているものも含まれている。行為の果報(カルマヴィパーカ)、息の学(スヴァラ)、質問と答え(占星術)、呪文、鳥占い、手相学、蛇など毒をもつ動物を扱う術、呪文をともなう魔術、錬金術、宝石鑑定学、性愛学、文学、音楽、歌と舞踊、象学、馬学、建築学、料理術、正義の知(政治・経済学、法学)が紹介される。中でも、行為の果報、息の学、文学、音楽、正義の知の解説が充実している。ペルシア語への翻訳・翻案文献の写本群と照合してみると、アブル・ファズルの記述は、現在に伝わっているサンスクリット語原典にかなり忠実な翻訳文献にもとづいていることがわかる。写本の書写年代の違いや分布の広さから、それらの知の分野の受容度が高かったことも推測できる。

②皇帝アクバルの宮廷翻訳局で翻訳された『マハーバーラタ』第12巻の前半を構成する「王法を説く巻」第122節ヴァスホーマ章では、ブリハस्पティによる知の伝承の説話が、ヴァスホーマがマハーデーヴァに知の分類について教を乞う物語に書き換えられている。ここで挙げられる諸学と諸技芸の14種は、論理学及び師と弟子の規範；天文学；医学；言語学；詩形すなわち文法学と統語論；韻律学；さらにヴェーダ学；礼儀作法及び礼拝や信仰についての知識；訴訟の裁定や訴訟法(法学)；プラーナの解説(ブラフマンの神学)；部族の支配及び臣民がいかにかふるまうべきかという世間の人々の秩序を守る規則を維持することに関する知識(哲学)とされる。さらに人相学、弓術、音楽、詩や言葉の意味を理解する学を加えて、18種の学問が基本的なものであるとされる。また、マハーデーヴァによるマハータントラと呼ばれる護符の知識と呪文の知識；18のスムリティ(4つのヴェーダの意味を説くもの)、「不死」と呼ばれるパタンジャリによる呪文の知識；ヤーマラ(マハータントラの果報についての知)；アーガマ(ヨーギンやサンニヤースィンやさまざまなセクトの教義や実践の知)

と技芸(『コーカシャーストラ』や、自らの死を予知するカーラ・ジュニャーナと呼ばれる知を含む64の知)などが挙げられる。

③網羅的ではないが、インド人の宗教・哲学的考え方を紹介した文献に、『諸宗派の学院』(1654-7)がある。ムッラー・ムーバドと自称するパトナ生まれのパールシー教徒(インドに逃れてきたゾロアスター教徒)からの改宗ムスリムが著したものである。自らの信奉するパールシー教、ユダヤ教、キリスト教、イスラーム、イスラーム諸派と並んで「インド人の見解」では12種の考え方が示される。スマールタカ・バラモンの世界観、『バーガヴァタ・プラーナ』による創造神話や神話的世界観、スマールタカ・バラモンの宗教的義務、ヴェーダーンタ学派、サーンキヤ学派、ヨーガの実践道、シヴァ教シャクタ派、ヴィシュヌ教、チャールヴァーカ(唯物論者)、論理学派、ジャイナ教、シク教を含む宗教諸派が、著者の実際に経験したエピソードなどを交えて紹介される。これらの描写には、同時代に次々と著されたヒンドゥー教諸派の特徴をまとめたペルシア語文献との類似性も見いだされる。

④1673年にデーヴィー・ダースというカーヤスタ出身のヴィシュヌ派のヒンドゥー教徒の手で編まれた『真理の精髓』と題される翻訳・翻案撰文集にも、ムスリム政権下で働く書記階級の学ぶべき知識の体系が示されている。全7章からなるこの書が扱う学問分野は、プラーナ文献に語られる神学(宇宙論、儀礼)や王統譜、倫理学、哲学(サーンキヤ哲学、ブラフマンの知と呼ばれるウパニシャットのヴェーダーンタ哲学、ヨーガの哲学と実践論)、医学、獣医学、音楽、歴史学(王統史)、統治論、弓術、兵法、幾何学、算術、文字学、文体論、占星術などを網羅している。

⑤一般にインドの古典的学問分類が14種と言われるのは、5世紀頃の『ヤージュニャヴァルキヤ法典』1.3に代表される分類法である。4つのヴェーダ；ヴェーダ聖典研究を補助するための6種の学問すなわち音韻学、祭式学、文法学、語源学、韻律学、天文学；さらにプラーナ、論理学、聖典解釈学、律法論の4種をあわせた14である。さらに医学、兵法、音楽学、実利論の4つが加わることで、プラーナ文献などに示される18分類が知られることになる。現存するサンスクリット語古典から翻訳されたペルシア語文献を精査していくと、ここに示されたインドの古典的知識の体系が幅広く伝えられていたことがわかる。だが、ペルシア語で著された綱要書が伝えるインドの古典的知の体系は、14や18という数はおさえつつも実学を重視したものであることが見て取れる。

(4) 副次的成果

①この研究の過程で副次的に明らかになったことの一つは、イスラーム世界に広く伝播したタントラ・ヨーガ文献で今は失われた『アムリタクンダ(Amṛtakunda)』に基づいた

と考えられるサンスクリット語文献群の固定と、翻訳・翻案文献のその後の広範な伝播経路である。これらのサンスクリット語文献群の一つは、ヤーマラ・タントラ文献群にルーツをもつ『ナラパティジャヤチャリヤー(Narapatijayacaryā)』(1177)であり、もう一つは後にナータ・ヨーガの文献にも加えられる『シヴァスヴァローダヤ(Sivasvarodaya)』(14世紀以前)である。これらのサンスクリット語文献の伝える「息の学」と呼ばれる質問者や占者の左右の鼻孔を通る息の特徴から行為の吉凶を占う方法や、「念想の学」と呼ばれる願望成就のための神格やヨーギニーへの祈願法は、ペルシア語百科事典に組み入れられたばかりでなく、様々な経路を通じてペルシア語やアラビア語文献として広まっていた。

②これらの知は、まず『カーマルー五十章編(Kāmarūpañcāsikā)』のペルシア語訳とされる文献に訳し入れられて、それがイランで編まれた160の学知を網羅したペルシア語百科事典『諸学の宝と泉の花嫁(Nafā'is al-funūn wa 'arāyis al-'uyūn)』(1353以降)の自然学の項に、インドのヨーガ行者の伝える「息の学」と「想像の学」として引用された。そしてムガル皇帝『フマーユーンに捧げられた知識の宝石(Jawāhir al-'ulūm-i humāyūn)』(1554以降)や、後の時代の『サーディクの証言(Shāhid-i Šādiq)』(1646)に孫引きされることになった。いずれの百科事典においても、独立した学知として新たに独立した項目として扱われたのである。一方、『カーマルー五十章良編』のペルシア語訳は、『生命の水槽(Hawḍ al-hayāt)』として縮訳されて、同名のアラビア語訳は、中東イスラーム世界から北アフリカまで広がり、トルコ語訳も産んだ。また、16世紀半ばにはシャッターリー教団のスーフィー導師ムハンマド・ガウスによって『生命の大海(Baḥr al-hayāt)』として再訳され、その一部は、「息の学」を伝える独立した論攷として広まり、スーフィー修道論の中に取り込まれた。19世紀には、イスラーム復興運動の旗手サヌースィーが、40のスーフィー教団の一つにヨーガ行者を教え上げ、その教えとして9つのチャクラへの念想法や禁欲主義を紹介した。『生命の大海』は、『真理の精髓』にも引用され、ブラフマンを知るための行法として紹介された。同じ時代、医学書の『ダーラー・シュコーに捧げられた治療の書('Ilājāt-i dārā shukohī)』にも、「息の知」は取り上げられている。

③占星術書としての『ナラパティジャヤチャリヤー』は、16世紀半ばにデカンで編まれた『諸学の星々(Nujūm al-'ulūm)』(1530以降)として知られる未完の百科事典に幅広く引用された。この書は、そこに描かれる星々を表す神格やヨーギニーたちの姿や幾何学的な図像の特異性によって、長い間多くの細密画研究者らの関心を集めてきたが、さまざまな幾何学的な形は、星座や星宿の影響力を文

字を通して占うための図像を写したものであることも判明した。『シヴァスヴァローダヤ』は、アブル・ファズルの『アクバル会典』では、諸学の一つとして独立して扱われ、60詩節あまりが紹介されている。さらにチャランダースによる『シヴァスヴァローダヤ』のヒンディー語訳も、18世紀半ばにペルシア語に翻訳されて『叡智の大海(Muḥīt-i ma‘rifat)』の中に、バクティ・ヨーガやカルマ・ヨーガなどと共にスヴァラ・ヨーガとして紹介されることになった。こうして、「息の学」という一つの分野を例にとっても、インドの伝統的知が、翻訳・翻案文献を通して広く伝えられ、イスラームの伝統的な知の体系の中に組み込まれていったことが明らかになった。

(6) 本研究の成果は、内外の学会やワークショップ、セミナーなどにおいて発表してきたし、今後も発表を続けていく。対外的には、2011年に開始された Perso-Indica プロジェクトに加わることで情報提供や助言を行い、この共同研究プロジェクトがめざす13世紀から19世紀にかけてインドの学問的伝統に関するペルシア語文献の調査と website 上と印刷物によるそのデータの公開に、特にムガル帝国時代以降の文献研究において貢献できると考えている。

(7) 今後の展望としては、海外研究者らと協力して、さらなる写本の解読を継続して、未確定の写本の原典を同定する作業を続ける。同時に、個々の翻訳・翻案作品とりわけ哲学思想文献を中心に、思想交流史における時代的、地域的、社会的影響を読み取る研究を進めていく。また、それぞれの学問分野における訳語辞書の作成のための準備を行っていく。国内的には研究者が少なく、研究内容が広く知られていないことから、個人的な発表のみならず、国際セミナーなどの企画に参画して、この分野の最新の研究などを紹介する機会を作っていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] 計2件(うち査読あり2件/うち国際共著0件/うちオープンアクセス0件)

①榊 和良, イスラーム知識人に伝えられたチャクラの念想法, 西南アジア研究, 査読有, オープンアクセスなし, 国際共著: 該当しない, 84巻, 2016年, pp.1-23.

②KAZUYO SAKAKI, Kāyastha: Mediators between the Islamic and Sanskritic Traditions of Knowledge Systems, *South and Southeast Asia Culture and Religion: The SSEASR Journal*, 査読有, オープンアクセスなし, vol.7, 2013, pp.43-61.

[学会発表] 計8件(うち招待講演0件/うち国際学会3件)

①榊 和良, Tantric elements in Persian translated works on astrology, The fifth Perso-Indica conference (University of Bonn), 2018年2月1日, ボン(ドイツ).

②榊 和良, 死の超克—翻訳された予兆学と冥界説話—, 日本宗教学会第76回学術大会, 2017年9月16日, 東京大学.

③榊 和良, 業と輪廻: カルマ・ヴィパーカのイスラーム的解釈の展開, 日本宗教学会第75回学術大会, 2016年9月10日, 早稲田大学.

④榊 和良, Changing Ourselves – The textual transmission of the Śivasvarodaya, The third Perso-Indica conference, 2015年9月3日, デリー(インド).

⑤榊 和良, Nature of the translators and adapters – Written sources of Yoga in Persian, The 16th World Sanskrit Conference, 2015年6月29日, バンコク(タイ).

⑥榊 和良, ナータ・ヨーガを説く「ギーター・サーラ」, 日本南アジア学会第27回全国大会, 2014年9月28日, 大東文化大学.

⑦榊 和良, 翻訳文化の示す学知と創造性, シンポジウム 前近代南アジアにおけるイスラームの諸相—在来社会との接触・交流・変容—, 2014年10月5日, 京都大学.

⑧榊 和良, イスラーム文献に見るインドの出家遊行者たち, 日本南アジア学会第26回全国大会, 2013年9月5日, 広島大学.

[図書] 計1件

① 今松泰・澤井一彰編, 前近代南アジアにおけるイスラームの諸相—在来社会との接触・交流と変容— (NIHU Research Series of South Asia and Islam 8), 翻訳文化の示す学知と創造性, 2015年, 99(pp.33-60).

7. 産業財産権 [出 願] 計0件

8. 科研費を使用して開催した国際研究集会 [国際研究集会] 計0件

9. 国際共同研究
共同研究相手国 相手方研究機関
ドイツ University of Bonn

[その他]
ホームページ等 無

6. 研究組織

(1) 研究代表者

榊 和良 (SAKAKI KAZUYO)

研究者番号: 00441973